

研究 報告

福島県の夏秋トマト栽培におけるトマトかいよう病の伝染源と防除対策

福島県農林水産部 **おお 大 竹** **ひろ 裕** **のり 規**
 福島県農業総合センター **ほり 堀** **こし 越** **のり 紀** **お 夫**

はじめに

トマトかいよう病は *Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis* によって引き起こされる細菌性の病害である。本病に感染すると、中・下位葉を中心に葉の周縁部が萎れ、葉脈間の脱水症状等が現れる（図-1 左）。さらに病勢が進行すると株全体が萎縮・枯死する（図-1 右）。本病が圃場全体にまん延していると、圃場全体の株が徐々に枯死し、最終的に圃場全体が壊滅状態となることから、生産者の経済的損失も大きい。眼前で株が枯死していく状況による精神的影響もあり、営農意欲の低下に繋がっている。

また、本病は一度発生すると防除が難しいことから、生産現場では対策に苦慮している。本病は1958年に国内で初めて発生が確認された（成田・馬場，1959）。福島県では1966年に初確認され、現在もトマト生産現場で重要な病害の一つとなっている。

トマトかいよう病は種子や土壌および支柱などの資材が一次伝染源と言われている（岸，1998）。福島県内の発生状況を調査すると、共同育苗や購入苗等同一ロットの苗を使用しているにもかかわらず、一部圃場でのみ継続して発生していることから、福島県では種子が一次伝染源となっている可能性は低いと考えられた。土壌伝染については、圃場での病原細菌の生存期間の報告は少ないが、国外では被害茎葉などとともに罹病残渣内に長期生存し、伝染源となることが報告されていることから（FATMI and SCHAAD, 2002；VEGA and ROMERO, 2016）、本県においても罹病残渣は翌作の伝染源として重要であると考えられる。資材からの伝染について STRIDER（1969）は、トマトかいよう病菌が農業資材上で7～8か月間生存すると報告しているが、生産現場の資材から病原細菌が直接分離された報告はなく、実際に資材上で長期生存した本病菌が伝染源となったことを示した報告もない（川口，2010）。



図-1 トマトかいよう病の病徴
 葉脈間の脱水症状（左）、萎縮症状（右）。

Sources of Infection and Disease Control of Tomato Bacterial Canker in Summer and Autumn Harvesting Cultivation in Fukushima Prefecture. By Hironori OOTAKE and Norio HORIKOSHI

（キーワード：トマトかいよう病，カーバムナトリウム塩，一次伝染源）